

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」2012年度第3回研究会

日時：2012年10月14日（日曜日）午後1時～7時

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306号室）

報告者名：

1. 山越言（AA研共同研究員、京都大学）
2. 内堀基光（AA研共同研究員、放送大学）

内容：

1. 「野生動物の『ハビチュエーション』について」（山越言）

ヒトは太古より、狩猟採集・牧畜・農耕といった生業に対応して、大型野生獣との間に追跡、忌避、馴致、依存といったさまざまな関係を築いてきた。ヒト側が野生獣との近接関係を維持し許容する関係としては、家畜化のプロセス、宗教的禁忌に基づく許容などが挙げられよう。さらに近代以降には、動物生態学者による野生個体群の観察や、野生動物観光・エコツーリズムという関係のあり方が新たに加わった。

今日のアフリカの野生動物観光をめぐる潮流には、植民地時代から継続する富裕層による狩猟サファリを基盤とした対立的関係と、保護区内で馴致した大型野生獣を対象にした大衆化した非消費的接近観察（フォトサファリ）がある。両者は動物の人馴れにかんしては対立関係にあり、現在主流となっている後者が、東アフリカの自然保護制度史のなかで、どのように発展して来たのかは興味深いテーマである。

また、動物生態学の中で特例的に直接観察を重視する傾向にある霊長類研究者は、対象個体群をさまざまな方法で馴致してきた。餌づけ、人づけやその他の多様なアプローチが考案されてきたが、保全の立場から馴致そのものの持つ負の側面も指摘されてきた。馴致を基盤とした近代霊長類学のパイオニアの一人である今西錦司が、霊長類研究を発想する以前に、内蒙古での研究に基づき、馴致による家畜化のプロセスについての独自の仮説を提示していたという符合は興味深い。近年興隆を見せている、森林性のゴリラやチンパンジーを対象にした観光は、馴致された個体群を対象にした観察、という霊長類研究的なアプローチの発展型と考えられ、スポーツハンティングを原型として発展したサバナにおけるサファリ観光とは異なる出自を持つと考えられる。

ギニア共和国ボッソウ村は、村人から祖霊の化身と信じられている野生チンパンジーが、村落周辺の里山的森林に生息していることで世界にその名を知られてきた。奈良公園のシカと同様に、宗教的禁忌により野生動物が人の生活と隣接して生息することを許されている一事例である。

現在ボソウの野生チンパンジー個体群では、人獣共通感染症の潜在的脅威、村人に対するチンパンジーの攻撃事例の増加、畑荒らしの被害の増加、移入個体の不在による個体群の高齢化といった保全上の諸問題が顕在化している。いずれもその根本原因として、過剰な人馴れが想定されるため、これ以上の人馴れを防ぐための早急な対策が求められる。研究目的であれ観光目的であれ、意図して人と大型野生獣との距離を縮めようとする場合には、人馴れのネガティブな側面に配慮した、慎重な倫理デザインが必要である。

## 2. 「見えない他者、非在の他者：カミなどのあり方をめぐって」(内堀基光)

### 1. 射程の取り方

#### 1-1. 大きな射程の取り方

進化的には「他者」認知とインタラクションの有りようの異同(の比較)が問題なのだろうが、これを民族学プロバー領域で行うとどうなるか：その困難と可能性を問うことが、まずははじめに立てられる課題である。

「他者」観念と進化とどう関連づけるのか：ヒトとヒト以外の霊長類比較という比較のレベルならば、たとえば、チンパンジーとニホンザルとヒトとの間の異同研究はできるわけだが(cf. 明和 2004)。まさかミラーニューロンレベルの話まで持ち出す必要はないだろう。

#### 1-2. 小さな射程の取り方：民族学で

(人類学者の対象としての他者、ということはここでは考えない。これはこの研究会の主旨とは別のところにある課題である)

社会的文脈で「自-他」とは言うが、民族学的にはおそらくこのことの実証やら実例を挙げて論じることが求められるのだろうが、このレベルの議論はどこまで理論的なテーマとして掘り下げられるか。社会(文化)的文脈と「発達」の問題などは語れるだろうが、すでにたくさんの蓄積のある「育児研究」のようなものになってしまいそう。

民族学的自己-他者論を意味論的にしてしまうと、person(hood)論のようなものになりそうで、これまたあまり新奇なことではない。

## 2. 人類社会における「他者」

「他者」の一般的価値づけ方：

他者の位置：否定的価値をもつ他者と中立的価値・肯定的価値をもつ他者者  
他者と「他人」とのあいだ

他者をわざわざ他人と呼ぶこと

排除と包摂という文脈での他者

これはいくらでも民族誌の中で論じられようが、問題は排除の基盤をどのように理屈づけるかである

最終的には極端なエスノセントリズムまで至る「他性」の形成(=創出・構築)集合としての他者のことを考える、このとき他者でない他者=仲間が前提となってくる。他者は目の前にいる個体ではなく、あるカテゴリーに属するものとしての他者になる。

悪評高い van den Berghe の論のような社会生物学のパロディ(のようなもの——本人は真剣なのか?)もあり、進化との関連では、こうしたものをまったく無視というわけにもいかない。他者を目に見えるかたちで作り上げることは、自他集団の境界設定の提要である。こうした「見えやすくされた」他者の具体的形成プロセスは歴史学の課題だが、意味あるしかたでそれをどこまで抽象化して論じることができるか。

### 3. 見えない他者と、その存在を「感覚」するとき

単なる表象ではない「見えない他者」

見える他者と見えない他者の位相の違いはどこにあるか

Durkheim 流の社会(集団)の sublimation 議論に乗ってしまえば簡単だが

非在の他者としての死者の特権性について

現実的な互酬的交渉を閉ざされた関係における「虚構」の意義

カミはいかなる文脈、意味合いで他者になるか

これが「見える」ときのことを考えてみる(→次節へ)

マレビト論まで

ここではない「どこか」の比較超越性(?)とのかすかなパイプ

### 4. 他者が他者でなくなる時

上の文脈で、他者はどこかで他者でなくなる例外時・例外場をもつことにより、十全の意味で他者としての機能をもつのだろう。

また、自己と自己の同位の他者(いろんな近い他者も含む)との相違はどこにあるかということに注意が向くとき、別の可能性が出てくる。

簡単に言ってしまうと、他者の自己化/自己の他者化、といったこと

さらには、異なる存在レベルの他者との/への融合≒差異の無化などの可能性

内なる見えない他者

superego でもあるし、「心の鬼」のようなものでもありうるし、

こうした自己の反照としての他者が、ある具体的なイメージをとることがある

人であるような／人でないような他者の現れ  
一般論として、他者の存在空間の広がり、他者像の多様化が進むこと  
の意義  
→自己を自己として語ることなく、自己を規定しやすくなる（ということか？）

5. 他者論の民族誌：実践練習

イバンにおいて語ってみよう

orang bukai という表現について、kaban の反対概念

イバン語における orang の意味論

iban, antu, petara, jelu, ほかの「ものもの」

自己アイデンティティの階層：個体として、集合として

多様な他者とのインタラクションの位相

他者というより Hallowell の用語法における行動空間における「異族」  
の出現

これは行動空間の拡大のもっとも明白な現象である

（たとえば）Tuan の位置について→chelum であるものでないもの  
生活における同一性と異質性の認識について